

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 7 年 6 月 6 日現在

機関番号：10102
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2024
課題番号：20K20074
研究課題名（和文）文化遺産観光における観光者のパフォーマンスと地域社会との相互作用についての研究

研究課題名（英文）Research on the performance of tourists and its interaction with local communities in cultural heritage tourism

研究代表者
平井 健文（HIRAI, Takefumi）
北海道教育大学・教育学部・講師

研究者番号：60846418
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、文化遺産観光の場において、観光者のパフォーマンスが創発的に文化遺産の意味を生成しうるか、またそれが地域社会にどのような影響を与えるかを探究した。まず批判的ヘリテージ研究（Critical Heritage Studies）の理論研究から、文化遺産が観光とともに「共創」されるプロセスであるという基本的な視座を構築するとともに、その成果を訳書として刊行した。続いて事例研究を通して、上述した創発性が発揮される条件を考察した。観光空間の性質や観光形態などがこの条件を左右することを見出し、創発性が発揮される困難さを指摘しつつ、固定的な言説に揺らぎを与える契機についての示唆も得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的には、日本では十分に展開されてこなかった批判的ヘリテージ研究の理論を訳書として広く紹介しつつ、それを個別の事例へと援用し、事例研究と接合させるための課題を抽出した点を意義として挙げられる。また、文化遺産の社会学に観光研究の知見を接合させ、今日的な文化遺産保存の力学を明示したことも、本研究の意義の一つである。社会的に見ると、本研究のテーマは文化遺産観光の持続可能性の探究や、文化遺産の保存活用を通じた社会的包摂のあり方の検討へとつながるものであり、これらの探究の萌芽となる知見を示せた点が意義として考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study explores whether tourists' performances at cultural heritage sites can emergently generate new meanings of heritage, and how such processes may impact local communities. First, by engaging with the theoretical framework of Critical Heritage Studies, the research established a foundational perspective that sees cultural heritage as a process which is "co-created" through tourism. The outcomes of this theoretical inquiry were also published as a translated book. Following this, case studies were conducted to examine the conditions under which such emergent meaning-making occurs. The study found that the characteristics of the tourism space and the forms of tourism significantly influence these conditions. While acknowledging the difficulties in fostering such emergence, the research also offers insights into how established discourses may be destabilized and reinterpreted.

研究分野：観光社会学、批判的ヘリテージ研究

キーワード：文化遺産 観光 パフォーマンス 創発性 インタープリテーション 産業遺産

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本では2000年代以降、文化遺産への社会的注目の高まりに応じて、社会学や隣接領域での研究が蓄積されてきた。そのアプローチは以下の二つに大分できる。

(1) 文化社会的アプローチ：

文化遺産をめぐる制度や価値構築プロセスの考察を通して、集合的意思や消費社会などマクロな見立てを用いつつ、そこに介在する権力性を焦点化する。欧米圏の批判的ヘリテージ研究 (Critical Heritage Studies) でも同様の傾向が看取できる (木村 2014; Smith 2006 など)。

(2) 環境社会的アプローチ：

生活者の営為や地域社会の構造に目を向けつつ、地域社会における行為者の正統性の獲得や、伝統の継承のプロセスを主題化する (森久 2016; 堀川 2018 など)。

しかし、(1)では地域社会で保存活用に関わる行為者の実践が後景に退き、(2)では保存/開発という二項対立的な構図の下で、観光は外的な開発圧力と一元的に捉えられてきた。2019年の文化財保護法改正が顕著に示すように、地域社会は文化遺産保存の主体として「総がかり」での参画が求められる一方、観光は保存の手段として位置づけられるようになっていく。既往のアプローチからでは、こうして文化遺産保存の対象と行為者を拡張することが社会的に要請され、観光の役割が変化しつつある状況を捉えるのは難しい。

一方で、(1)が明らかにしてきた、言説や行為者の排除・周縁化といった政治性の問題、(2)が明らかにしてきた、地域社会内部の社会層や集合的記憶の複数性という論点は、現在でも検証に値するものと考えられる。本研究では、これに観光学が蓄積してきた観光者のパフォーマンスについての研究成果を接合させ、今日的な文化遺産の保存活用をめぐって地域社会に生じる多様な力学を明らかにすることを試みる。

2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究では次の2点の目的を定める。第一に、観光者のパフォーマンスは、文化遺産をめぐる既存の支配的な言説を強化するのか、それとも創発的に新しい意味を生成するのか、それぞれの条件はいかなるものかを明らかにすることである。第二に、観光者のパフォーマンスが地域社会の行為者にいかなる変化を促し、その結果、文化遺産のインタープリテーションや、保存活用の実践にいかなる変化が生じるかを明らかにすることである。

T. Edensor が指摘するように、観光空間は高度なデザインとコントロールの下で、支配的な言説や権力を強化する「飛び地的空間」と、観光者を含む多様な行為者が創発的に新しい意味の生成を促す「異種混淆的空間」の、二つの矛盾した性質を併せ持つ (Edensor 2000)。そして、両方の空間の性質は、観光者のパフォーマンスを規定すると同時に、逆に観光者のパフォーマンスによっても規定される。上述した第一の目的は、文化遺産観光の空間に発現する双方の性質を観光者のパフォーマンスに着目することで見出すとともに、「異種混淆的空間」が生成される条件を明らかにすることと換言できる。第二の目的は、そうした空間の性質が形成されることで、地域社会の側にいかなる変化が生じるのか、観光者と地域社会の相互作用に焦点を当てて明らかにすることと換言できる。

3. 研究の方法

研究開始時 (2020年度) に COVID-19 の流行が始まったことで、当初の研究計画は大幅な修正を余儀なくされた。当初は参与観察、聞き取り調査を中心とする研究手法を想定していたが、コロナ禍により調査は後ろ倒しにせざるをえず、代わって理論研究を先行させた。

(1) 理論研究：

欧米圏で研究が進む批判的ヘリテージ研究は、まだ日本では十分に受容されておらず、その理論的射程の検討が求められた。そこで、研究会を組織した上で、基本文献の邦訳および出版と、関連業績の横断的な検討に取り組んだ。これにより、本研究の理論的基盤を構築しつつ、研究課題に対する示唆を得ることを企図した。

(2) 事例研究：

北海道赤平市の「赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設」(以下、ガイダンス施設)での調査に基づく事例研究を行った。同施設では、住友赤平炭鉱跡の立坑など諸施設を活用して、ガイドツアーを定期的実施している。そこで、ガイダンス施設において、ツアーの参与観察やスタッフ・ガイドへの聞き取り調査を行うことで、観光者と地域社会の行為者との相互作用の実際を把握することに努めた。

なお、(1)は2020年度から開始できた一方、(2)は本格的には2023年度からの実施となった。

4. 研究成果

(1) 理論研究：

もっとも大きな成果は、批判的ヘリテージ研究の基本文献とされる Harrison (2013) の邦訳であり、2023年に『文化遺産 (ヘリテージ) といかに向き合うのか: 「対話的モデル」から考え

る『持続可能な未来』（ミネルヴァ書房、木村至聖ら4名と共訳）として刊行した。また、期間中に発表した論文や近刊においても、その成果が援用されている。その射程は広いと、ここでは本研究課題に密接に関連する部分のみを抽出して概説する。

理論研究の主たる成果に、「プロセスとしての文化遺産」論の有効性を確認できた点がある。これは、文化遺産を実体として捉えず、その価値構築をめぐる社会的プロセスであると見なす視座であり、前出の L. Smith らが提唱してきた。文化遺産の創発性や、その保存が地域社会にもたらす力学を主題化する本研究において、その基盤となる視座の有効性を明示できたことには大きな意義がある。その中で、観光と文化遺産は「共創」されるものであり、両者の相互作用を捉える有効性も再確認できた (Dicks 2004; Kirshenblatt-Gimblett 1998 など)。また、2010 年代以降、アクター・ネットワーク理論の隆盛を受けて、文化遺産の物質性を重視することの意義が盛んに論じられるようになっており、この点も上述した訳出の過程において明示されたポイントである。これらはいずれも、(2)事例研究の基盤となる知見であった。

一方で、これら既往の批判的ヘリテージ研究の課題についても整理することができた。それは第一に、理論研究と事例研究との接合面が探究されていないこと、第二にローカルなアクターの多様性が理論研究の中では十分に扱われていないことである。第一の課題は、換言すれば現実の事象への理論の適応方法が明示されていないということであり、それは第二の課題に起因するものでもある。つまり、既往研究では文化遺産の保存に関わるアクターを民族、地域住民、観光者、あるいは大括りの社会層などとして提示することが多く、事例研究に接合しようとする、現実の力学の多様性を十分に扱えない場合がある。物質性を重視するアプローチでも、具体的にどのような分析が可能かは示されないことがあり、これらの課題を踏まえて事例研究に取り組み必要性があると考えられた。

(2) 事例研究：

事例研究の開始は 2022 年度末までずれ込み、2023 年 3 月にガイダンス施設でのガイド補助員養成講座に参加したことから研究を開始した。2023 年度からは、ガイド補助者として複数回のガイドツアーの運営を補助し、参与観察を行ったほか、関係者への聞き取り調査を実施した。その成果は、2025 年度より順次学会発表や論文として公開していくが、大分すれば次の 3 点にまとめられる。

①「飛び地的空間」への変化：ガイドツアーの位置づけの変化

2016 年以前、住友赤平炭鉱跡は運営会社であった住石マテリアルズが管理し、住民団体がその都度住友側に交渉することで、一般向けに開放してきた。これはイベントや小規模なバスツアーの受入れ時などに限られ、訪れる観光者の層も限定されていた。また、ガイドは基本的にボランティアであった。一方でガイダンス施設の開業後、立坑は赤平市の施設となり、一般の観光者から教育・研修旅行の参加者まで様々な層が訪れるようになった。ガイドツアーの時間やルートは固定され、以前と比べると内容も平準化されている。

このように、前出の Edensor の整理を踏まえれば、住友赤平炭鉱跡という文化遺産は「飛び地的空間」へと移行しつつあると言える。ガイドツアーにおけるインタープリテーションは、赤平市における特定の社会層の言説が反映されるものでもあり、また公的な施設という制約や時間的な限定性もあり、少なくともガイダンス施設開業前に比べれば、インタープリテーションを通じた創発的な意味の形成は難しくなっていると考えられる。また、この移行はガイダンス施設側の事情だけでなく、そこを訪れる観光者の属性や観光形態の変化によっても為されることが調査から示唆された。

②インタープリテーションの揺らぎの可能性

ただし、ガイドツアーには一定の揺らぎの余地が残されている。例えば上述した養成講座では、受講者向けのマニュアルや教材は用意されず、逆にそれぞれが「一つの得意分野」を持つことの重要性をガイダンス施設側は強調している。現行のガイドツアーも属人的な要素に大きく依存していて、その再現性は低い。そのため、ガイドも補助者も、ツアーの催行を通して自らの語りを変化させていく可能性を有している。

その前提には、ガイダンス施設側が観光者の多様性を強く認識していることがある。ガイダンス施設開業前と異なり、多様な動機を持つ人が訪れるようになり、またそれぞれの炭鉱の知識も異なる中で、ガイド内容を定式化することは実態にそぐわない。この点においては、創発性を担保できる要素をガイドツアーの中に看取することができる。

③観光者のパフォーマンスを促す仕掛け

観光者側に目を向けると、観光者のパフォーマンスによってガイドやガイダンス施設の関係者の認識を変化させるような機会は、参与観察の中では確認できなかった。一方で、ガイダンス施設側の工夫、またガイドツアーの主たる対象である立坑の空間的な特徴から、徐々に参加者がガイドの語りや耳を傾けるようになる様子も確認できた。前者が、実際に使われていた「モノ」を持たせること、後者が、ツアーの後半になるほど参加者が見学できる空間が限定されていくことである。こうした点が、観光者からガイドへのアクションを誘発する可能性自体は残されていると言える。

(3) 総括と課題：

理論研究においては、本研究の基本的視座として①プロセスとしての文化遺産、②「共創」さ

れる観光と文化遺産、③文化遺産の物質性の重要性という3点を抽出し、一方でそれらを地域社会の内部や観光者の多様性、また観光空間の具体的な物質性から検証していく必要性も示した。これを踏まえ、本研究の目的に立ち返り、観光者のパフォーマンスが持つ創発性や、それが地域社会に与える影響について事例研究を通して考察した。

調査からは、創発性が発揮される条件は非常に限定的であり、地域社会のアクターにまで影響を及ぼすような観光者のパフォーマンスが生成されることの困難さが示唆された。ホスト側のコントロールに加え、ゲスト側の属性や観光形態によっても、文化遺産をめぐる観光空間は「飛び地的空間」としての性質を強める。文化遺産観光の一般化は、こうした空間の生成を促す一つの要因にもなっていると考えられる。一方で、ツアーにおけるインタープリテーションの内容の定式化を避けることや、観光空間そのものやモノの作用によって観光者のパフォーマンスを促す可能性など、「飛び地的空間」に揺らぎを与える契機も見出すことができた。

以上の知見は主に、研究代表者がガイド補助者として参加したツアーの参与観察に基づくものであり、それゆえ詳細な記述が可能になった反面、一般性の担保については課題も残る。特に、文化遺産観光の生成段階に応じて、また別の知見を得られる可能性がある。この段階別の調査・考察を行うことで、上述した課題への応答も可能になると考えられる。

【引用文献】

- Dicks, B., 2004, *Culture on display: The production of contemporary visitability*, Open University Press.
- Edensor, T., 2000, "Staging Tourism: Tourists as Performers," *Annals of Tourism Research*, 27(2): 322-344.
- Harrison, R., 2013, *Heritage: Critical approaches*, Routledge. (=木村至聖・田中英資・平井健文・森嶋俊行・山本理佳訳, 2023, 『文化遺産といかに向き合うのか——「対話的モデル」から考える持続可能な未来』ミネルヴァ書房.)
- 堀川三郎, 2018, 『町並み保存運動の論理と帰結——小樽運河問題の社会学的分析』東京大学出版会.
- 木村至聖, 2014, 『産業遺産の記憶と表象——「軍艦島」をめぐるポリティクス』京都大学学術出版会.
- Kirshenblatt-Gimblett, B., 1998, *Destination culture: Tourism, museums, and heritage*, University of California Press.
- 森久聡, 2016, 『<鞆の浦>の歴史保存とまちづくり——環境と記憶のローカル・ポリティクス』新曜社.
- Smith, L., 2006, *Uses of Heritage*, Routledge.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 平井健文	4. 巻 13(1)
2. 論文標題 境界地域におけるヘリテージ化の力学と観光：サハリンに残る樺太期の遺構を例に	5. 発行年 2025年
3. 雑誌名 観光学評論	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 嶋崎尚子・笠原良太・坂田勝彦・平井健文	4. 巻 1
2. 論文標題 樺太引揚者の炭鉱への移動プロセス：その構造と経験に関する実証的研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 JAFCOF樺太研究会リサーチ・ペーパー	6. 最初と最後の頁 1-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 平井健文
2. 発表標題 境界地域におけるヘリテージ化の力学と観光：サハリンに残る日本統治期のヘリテージを例に
3. 学会等名 観光学術学会第13回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 平井健文
2. 発表標題 樺太の炭鉱労働者の再就業プロセスに見る複層化された移動
3. 学会等名 サハリン樺太史研究会第70回例会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 平井健文
2. 発表標題 帝国日本における観光の役割の再検討：近年の研究を踏まえて
3. 学会等名 北海道大学観光学高等研究センター 第23回オンライン観光創造フォーラム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 平井健文
2. 発表標題 戦前から戦後にかけての石炭産業と人の移動：樺太および北海道の炭鉱を事例に
3. 学会等名 国際ワークショップ「引揚者と残留者：生活と言説に注目して」（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院主催）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Takefumi Hirai (分担執筆)、Svetlana Paichadze & Jonathan Bull eds.	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 272
3. 書名 End of empire migrants in East Asia: repatriates, returnees and finding home	

1. 著者名 ロドニー・ハリソン著、木村至聖・田中英資・平井健文・森嶋俊行・山本理佳訳	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 368
3. 書名 文化遺産（ヘリテージ）といかに向き合うのか：「対話的モデル」から考える持続可能な未来	

1. 著者名 平井健文（分担執筆）、上水流久彦編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 248
3. 書名 大日本帝国期の建築物が語る近代史：過去・現在・未来	

1. 著者名 平井健文（分担執筆）、木村 至聖・森久聡編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 216
3. 書名 社会学で読み解く文化遺産：新しい研究の視点とフィールド	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------